



TITLE:

京大広報 No. 508

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 508. 京大広報 1996, 508: 133-144

ISSUE DATE:

1996-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209254>

RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.



京大広報

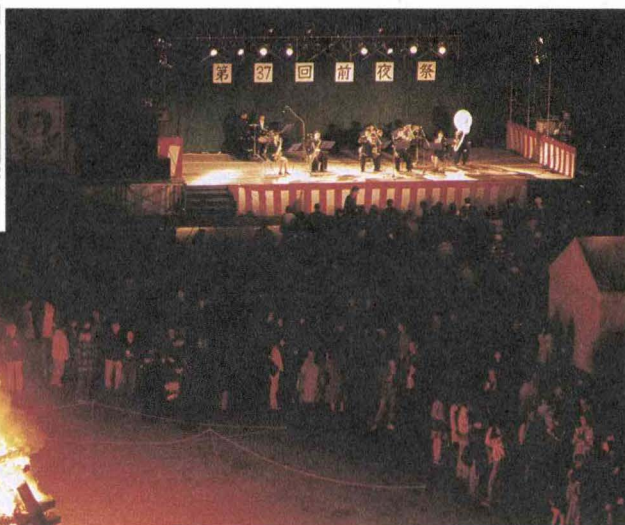
No. 508

1996. 12



昭和初期の園遊会と

今年の11月祭



—関連記事本文143ページ—

目次

〈大学の動き〉

- 平成8年度国立学校施設整備事業の決定…… 134
- 平成9年度大学入学者選抜
大学入試センター試験の実施…… 134
- 厚生補導担当教官研究会の開催…… 134

〈部局の動き〉

- 大学院エネルギー科学研究科創設および
エネルギー理工学研究所改組合同記念式典 … 135
- 防災研究所改組記念講演会・式典・祝賀会… 135

〈栄誉〉

- 奥田 東名誉教授, 小葉田 淳名誉教授,
坂井利之名誉教授が文化功労者に選ばれる… 136
- 清水剛夫名誉教授, 糸川嘉則大学院医学研究科
教授が紫綬褒章を受賞 …………… 138
- 医学教育等関係業務功労者の表彰………… 139

〈日誌〉…………… 139

〈訃報〉…………… 139

〈文化交流〉

ハワイの印象 太田 耕司 …… 141

〈随想〉

羊のユートピア 名誉教授 亀谷 昶 …… 142

〈京都大学の百年(第22回)〉

京都帝国大学における祝日の変遷(続) …… 143

〈洛書〉

オゾン研究の復活 村松 久史 …… 143

〈お知らせ〉

「白馬山の家」の冬季開設 …………… 144

京都大学広報委員会

大学の動き

平成8年度国立学校施設整備事業の決定

平成8年度国立学校施設整備事業のうち、本学関係分は次表のとおりである。

事業名	構造・階	面積	備考
総合人間学部校舎	R 4-1	1,520m ²	※構造・階欄の凡例 ・R…………鉄筋コンクリート造 ・S…………鉄骨造（耐火被覆鉄骨造含む） ・4-1 ……地上4階，地下1階 ・+7 ……既設建物上部へ増築
人文科学研究所研究実験棟改修	R	2,490m ²	
医学部附属病院看護婦宿舎改修	R	3,160m ²	
基幹・環境整備 (平野地区：生態学研究センター移転予定地)		一式	
医学部附属病院外来診療棟	S R 5-2	27,540m ²	
文学部校舎	S R + 7	4,530m ²	
工学部校舎	S R 3-1	1,080m ²	

上記事業の実施に際し、工事周辺部におけるご協力をお願いします。

(施設部)

平成9年度大学入学者選抜 大学入試センター試験の実施

平成9年度大学入学者選抜大学入試センター試験は、平成9年1月18日（土）及び19日（日）の両日に実施される。

このため本学では、1月17日（金）の授業が休止される。

試験の概要は次のとおりである。

1. 期日及び試験科目

1月18日（土）

外国語，地理歴史，数学①，数学②

1月19日（日）

国語，理科①，理科②，公民

2. 試験場及び志願者数

北部・本部・総合人間学部・南部の各構内及び
関西文理学院

合計 8,860人

(学生部)

厚生補導担当教官研究会の開催

学生部では、例年学生部委員会委員を中心に学生に関する諸問題を討議し研究するため厚生補導担当教官研究会を開催しているが、今年度も10月19日～20日に、総長，学生部長，学生部委員会委員，学生部職員等，計43名が参加して、「学生生活実態調査からみる京大生の実情について」「学生部の在り方について」等を主たるテーマとして標記の研究会を開催した。

最初のテーマは、厚生補導の在り方や適切な厚生施策を考えるために、現在の京大生が学生生活をどう送っているのか、学生を取り巻く環境や学生の気質がどう変わったのか等京大生の実情を把握しよう



とするもので、学生懇話室の青木健次助教授を講師に招き、現代学生気質について講演いただき、平成7年度学生生活実態調査報告（学生部発行）を中心に分析し、京大生の実情について意見交換が行われた。

また、次のテーマでは、名古屋大学森 正夫副総長を講師に招き、名古屋大学学務部（学生部）の現状と課題、諸外国の大学の厚生補導の実情等について講演いただき、学生部の今後の課題、在り方等について活発な討議が行われた。

（学生部）

部局の動き

大学院エネルギー科学研究科創設 およびエネルギー理工学研究所改組 合同記念式典

今年4月に創設された大学院エネルギー科学研究科と、同5月に原子エネルギー研究所がヘリオトロン核融合研究センターを加えて改組されたエネルギー理工学研究所とが、合同の創設及び改組記念式典を11月1日（金）午後4時から、国立京都国際会館において開催した。

記念式典には、学内外関係者約250名が出席し、新宮秀夫研究科長及び東 邦夫研究所長の式辞に続き、井村裕夫総長の挨拶、来賓の雨宮 忠文部省高等教育局長（代理吉田 靖専門教育課リフレッシュ企画官）、曾我直弘大学院工学研究科長、岡田東一大阪大学産業科学研究所長から祝辞があった。

引き続き披露会が開催され、西川禎一大阪工業大学情報科学部長、上之園親佐未来エネルギー研究協会会長、野田忠吉日本鉄鋼協会会長、阿部博之日本機械学会会長（代理池上 詢副会長）、足立芳寛通産省工業技術院技術審議官の祝辞の後、福井謙一基



礎化学研究所長が乾杯、学内外関係者のほか両部局の教職員を交えて歓談した。

また、式典に先立ち、同日午前10時から同会館においてエネルギー及び未来科学に関する記念講演会が開催され、福井謙一、西川禎一両名誉教授、植田和弘経済学部教授、越後亮三東京工業大学教授の各講師から熱のこもった専門的かつ平易な講演に約350人の参加者は、エネルギー問題の技術的、社会的重要性、緊急性に関する理解を深めた。

（大学院エネルギー科学研究科
エネルギー理工学研究所）

防災研究所改組記念講演会・ 式典・祝賀会

防災研究所は、本年5月11日に「災害に関する学理の研究及び防災に関する総合研究」を設置目的とする5大研究部門・5附属研究センターからなる全国共同利用の研究所に改組された。これを記念して11月15日（金）午後2時半から京都グランドホテルにおいて記念講演会、式典、祝賀会を開催した。

記念講演会では、道上正規鳥取大学工学部長が「巨大災害の検証」、廣井 脩東京大学社会情報研究所教授が「人文社会科学的自然災害研究の現状と課



題」、さらに石田瑞穂防災科学技術研究所地圏地球科学技術研究部長が「リアルタイム地震情報システ

ムの構築」と題した記念講演を行った。

続いて、記念式典が開催され、高橋 保所長がその式辞の中で防災学の推進と本研究所改組の必要性について論じ、今後の防災学研究と教育に邁進する覚悟を披瀝した。続いて、林田英樹文部省学術国際局長（代理 北尾善信学術国際局研究機関課国際プロジェクト官）、井村裕夫総長（代理 瀬地山 敏総長特別補佐）、文部省所轄並びに国立大学附置研究所長会議第一部会長遠藤 剛東京工業大学資源化学研究所長から祝辞があった。また、文部省所轄並

びに国立大学附置研究所長会議会長、東京大学地震研究所長をはじめ、多数の関係者から寄せられた祝電が披露された。

その後、引き続き祝賀会が開催され、鎮西清高大学院理学研究科長、曾我直弘大学院工学研究科長の祝辞の後、秋田谷英次北海道大学低温科学研究所長の発声により乾杯し、歓談した。

なお、記念講演会には約150名、記念式典及び祝賀会には約250名の学内外研究者や関係者等の出席があった。
(防災研究所)

荣誉

奥田 東名誉教授、小葉田 淳名誉教授、坂井利之名誉教授が文化功労者に選ばれる

このたび、奥田 東名誉教授、小葉田 淳名誉教授、坂井利之名誉教授が平成8年度文化功労者に選ばれ、11月5日国立教育会館で顕彰式が行われた。以下に各氏の略歴、業績等を紹介する。



奥田 東名誉教授は、昭和4年京都帝国大学農学部農林化学科を卒業し、農事試験場技師を経て、同15年京都帝国大学農学部農芸化学科助教授、同22年教授となり、農芸化学第三講座を担当した。その後昭和36年農学

部長、同38年東南アジア研究センター所長、同38年京都大学総長に選出され、2期6年にわたって大学行政に尽力した。この間昭和43年国立大学協会会長となり我が国の大学の運営に多大な貢献をした。昭和44年京都大学名誉教授の称号を受けられた。

同名誉教授は、土壤肥科学および植物栄養学の研究分野において顕著な業績を挙げた。特に、畑地に比べ地力が維持される水田土壌の肥沃度の実態の解明に努め、水田の地力に対して土壌微生物の果たす役割をはじめて定量的に明らかにし、我が国における水田土壌微生物学の基礎を確立した。すなわち、水田における窒素栄養の解析研究を通して、我が国の水田にラン藻と光合成細菌などの光合成能を有する窒素固定微生物が広く分布することを確かめ、これらの微生物を分離・同定・純粋培養することに成

功し、これらを水田に接種すると地力維持の効果があることを実証した。さらに、ラン藻や光合成細菌の生態学的および生理生化学的な特性を明らかにして、水田土壌中での窒素経済に土壌微生物が重要な役割を果たしていることを解明した。

同名誉教授は、戦後直ちに放射性同位元素を植物栄養学研究にはじめて応用し、植物の無機栄養素の植物体内における挙動に関する新知見を見いだすとともに、大型放射性炭素同化装置を開発し、その後の光合成研究に大きく貢献した。

同名誉教授は、これらの業績に対して、昭和38年日本農学賞並びに読売農学賞を受賞した。同50年には勲一等瑞宝章を受章した。

同名誉教授は、退官後、関西国際空港調査会理事長を務め、同空港の完成に尽力した。また関西文化学術研究都市推進協議会会長などを歴任し、特色ある学研都市創設に尽力し、国際高等研究所理事長として研究所の創設・運営に大いに貢献した。

以上のような輝かしい研究業績と、我が国の学術研究と文化の発展における指導的な活躍がこのたびの荣誉をもたらしたものであり、誠に喜ばしいことである。
(農学部)



小葉田 淳名誉教授は、昭和3年京都帝国大学文学部を卒業し、同5年台北帝国大学文政学部講師、ついで助教授となり、戦後中華民国に国立台湾大学副教授として留用されたが、同21年帰国、翌22年京都帝国大学文

学部講師を嘱託された。昭和24年に京都大学文学部教授となって国史学第一講座を担当、この間、同28年の東京文理科大学閉学まで同大学教授を併任した。昭和44年停年退官、京都大学名誉教授の称号を授けられた。同年龍谷大学文学部教授に就任、同46年京都女子大学文学部教授に転じ、同51年定年退職。同年日本学士院会員に選ばれた。昭和56年から冷泉家時雨亭文庫常務理事、同62年から住友史料館館長の任にあり、現在に至っている。

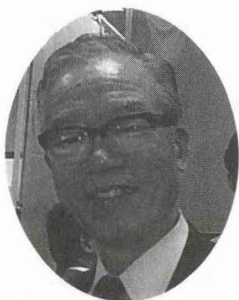
同名誉教授は日本史学の研究に専心し、顕著な業績を挙げた。日本・中国・朝鮮の諸文献に通じ、農山漁村に埋れた古文書を発掘し、これらを縦横に用いて清新着実な研究を発表してきた。戦前の主要関心は貨幣史・貿易史にあり、『中世日支通交貿易史』

等によって学界を裨益したが、鉱山史に重心を移した戦後の研究も実り多いものであった。代表作『日本鉱山史の研究』は日本鉱山史に関する最初の体系的著作で、16～17世紀に世界史的意義をもった日本の金銀生産の実態を、鉱山の技術・生産過程・支配経営の形態にまで及んで詳しく解明し、前人未踏の境地を開拓したものである。その業績により、昭和44年日本学士院賞が授与された。その後も金銀銅の生産流通や物価変動などに関する検討を進め、研究は広がりを増すばかりである。

同名誉教授は、戦後の国史学講座の再建に尽力し、多くの後進を育成するとともに、京都大学評議員、文学部博物館主事等によって大学行政にも参画した。また史学研究会などを通じて、我が国の日本史学界に指導的な役割を果たした。

以上のような輝かしい研究業績と、学術発展への指導的活動が評価され、同名誉教授は昭和50年に勲二等瑞宝章を受章したが、さらにこのたび文化功労者に選ばれたことは、誠に喜ばしいことである。

(大学院文学研究科)



坂井利之名誉教授は、昭和22年京都帝国大学工学部電気工学科を卒業、大学院特別研究生、京都大学工学部講師、同助教授を経て、同35年教授に就任し、電気工学科有線通信工学講座を担当した。昭和45年京都大学工

学部情報工学科創設に伴い、同学科情報基礎論講座を担当した。昭和57年より4年間文部省大学局（昭和59年7月より高等教育局）科学官を併任、昭和63年京都大学を停年退官し、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

退官後は龍谷大学の初代の理工学部長及び大学院理工学研究科長として創設事業と教育・研究に従事し、今日に至っている。

この間、昭和53年電子通信学会副会長、同58年情報処理学会会長、同59年国際パターン認識連盟会長に就任、また、日本学術会議会員を務めた。平成2年紫綬褒章、同7年勲二等瑞宝章を授与された。

48年の永きにわたる研究は、通信工学、情報工学、特にパターン認識、情報処理、情報通信の全般にわたり、著書『情報基礎学』3部作に集大成されている。

同名誉教授の研究は、音声・文字認識、言語処理、画像処理、文書理解及びそれらを利用したヒューマンインタフェース、コンピュータネットワークなど広きに亘る。特に音声認識においては、世界にさきがけて単語音声、連続音声の認識システムを、文字認識では数字・アルファベットの「非同期式文字読みとり装置」を、画像認識では人間の顔の認識システムを開発した。その後、通産省の大型プロジェクト「パターン情報処理システム」でも中心的な役割を果たした。それらと並行して、計算機による機械翻訳を初期の頃から開始し、英文和訳及び訳文の日本語での発声を行った。

一方で、当初から計算機ネットワークの研究に取り組み、オンライン情報処理の実験を日本で最初に行い、通信と処理の融合化の視点から、新しいハー

ドウェア、ソフトウェア、システム開発研究に従事し、KUIPNET (学科内ネットワーク)、N1 ネットワーク (最初の実験的学術情報ネットワーク)、IMES (大学内マルチメディアネットワーク) など次々と先駆的なシステムを開発した。

このように、坂井利之名誉教授はコンピュータの

黎明期から計算機を利用した先見的情報処理の研究に取り組み、学問上・實際上卓越した足跡を残した。

以上のような多大の業績により、このたび文化功労者として顕彰されたことは誠に喜ばしいことである。

(大学院工学研究科)

清水剛夫名誉教授、糸川嘉則大学院医学研究科教授が紫綬褒章を受章

我が国学術の向上発展のため顕著な功績を挙げたことにより、清水剛夫名誉教授、糸川嘉則大学院医学研究科教授が、平成8年11月3日に、紫綬褒章を受章された。以下に両氏の略歴、業績等を紹介する。



清水剛夫名誉教授は、昭和30年京都大学工学部燃料化学科を卒業、昭和32年京都大学大学院工学研究科修士課程燃料化学専攻を修了後、同年京都大学工学部助手、同38年講師、同43年助教授を経て、同63年教授となり、分子エネルギー工学講座を担当した。その間、昭和40～41年には米国ノースウェスタン大学で博士研究員を務めた。平成8年、退官と同時に京都大学名誉教授の称号を受けられた。同年より株式会社関西新技術研究所特別顧問となり、現在に至っている。

同名誉教授の研究分野は分子工学であり、特に究

極の機能材料といわれる分子素子実現に向けて多くの分子機能材料・量子機能材料を合成構築し、この分野の研究に大きな展開の道を拓いた。また、オレフィンの重合、遺伝子関連化合物化学、高分子触媒を中心とする機能性高分子、選択的能動輸送を中心とする人工機能膜、光機能分子システム材料など幅広い分野にわたって研究し、これら一連の研究業績に対して、昭和41年度日本化学会進歩賞、同53年度高分子学会賞、同63年度日本化学会学術賞が授与された。

以上のような同名誉教授の輝かしい業績を考えると、このたびの受賞は誠に喜ばしい。

(大学院工学研究科)



糸川嘉則教授は、昭和34年京都大学医学部医学科を卒業、同35年京都大学助手、同49年1月講師、同5月助教授を経て、同54年教授に昇任し衛生学講座を担当した。平成7年大学院重点化により京都大学大学院医学研究科に配置換となり、社会予防医学講座環境医学分野を担当した。同8年国際地域環境医学講座の初代教授に配置換となり、引き続き環境医学分野を兼担している。この間、昭和42年～45年には米国エール大学医学部で研究員を務めた。昭和63年より日本学術会議会員も務めている。また、平成7年より京都大学評議員、平成2年より京都大学医学部医の倫理

委員会委員長を歴任している。

同教授の研究分野は衛生学でビタミン・ミネラルの作用機構に関する研究、環境汚染物質の生体にならざる影響に関する研究、日本人の栄養状態に関する調査研究、開発途上国の健康問題に関する調査研究など多岐にわたる。なかでもビタミンB₁に関する研究はビタミンB₁が補酸素作用とは別に神経の興奮伝導に関与する作用を有する事を解明したもので、ビタミンの作用機序に新しい視野を導入し、ビタミン学の研究発展に大きく寄与した。また、公害として大きな社会問題となっていた原因物質カドミウム、PCB などにつき、その発症機構を明らかにした。さらに、種々のミネラル・微量元素と健康との関係について多くの新事実を解明した。また、国

同8年国際地域環境医学講座の初代教授に配置換となり、引き続き環境医学分野を兼担している。この間、昭和42年～45年には米国エール大学医学部で研究員を務めた。昭和63年より日本学術会議会員も務めている。また、平成7年より京都大学評議員、平成2年より京都大学医学部医の倫理

内外において種々のグループを対象にフィールド研究を実施し、健康・栄養状態を評価し、健康指導等も実施してきた。

これらの研究業績に対して、昭和50年日本ビタミン学会奨励賞、昭和60年フランス医学会銅賞、昭和

62年日本栄養・食糧学会賞、平成4年ベルツ賞が授与された。

以上のように同教授の輝かしい業績を考えると、このたびの受章は誠に喜ばしい。

(大学院医学研究科)

医学教育等関係業務功労者の表彰

医学に関する患者診療等に係る補助的業務に関し顕著な功労があったことにより、忠田鄙子技官（医学部附属病院副看護婦長）が、また、医学に関する教育研究に係る補助的業務に関し顕著な功労があっ

たことにより、平井 要技官（胸部疾患研究所附属病院臨床検査技師）が、11月18日、文部大臣より平成8年度医学教育等関係業務功労者の表彰を受けた。

日誌

1996年10月1日～10月31日

- 10月2日 SCS（衛星通信大学間ネットワーク）事業記念式典及びシンポジウム
- 14日 京都大学事務電算化担当職員研修（18日まで）
- 〃 京都大学春秋講義 月曜講義（以降の日程は、21日、28日、11月11日、18日）
- 15日 ドイツ連邦共和国 ヴッパータール大学 Erich Hoedl 学長他1名来学、総長特別補佐及び関係教官と懇談
- 〃 環境保全委員会
- 16日 国際交流委員会
- 〃 京都大学春秋講義 水曜講義（以降の日程は、23日、30日、11月13日、20日）
- 18日 関西アメリカンセンター Karen Faye 館長他2名来学、総長及び関係教官と懇談

- 19日 京都大学市民講座（以降の日程は、26日、11月2日）
- 21日 タイ王国 タマサート大学 Noranit Setabutr 学長他3名来学、総長及び関係教官と懇談
- 22日 評議会
- 〃 後援会助成事業検討委員会
- 〃 教育課程委員会
- 23日 アメリカ合衆国 ブラウン大学 Samuel F. Babbitt 極東担当学長首席補佐他2名来学、総長特別補佐及び関係教官と懇談
- 29日 教育課程委員会
- 31日 スウェーデン王国 ウプサラ大学 Stig Stromholm 総長他2名来学、総長特別補佐及び関係教官と懇談

訃報

滝澤 精二 名誉教授



本学名誉教授 滝澤精二先生は、10月13日逝去された。享年71。

先生は、昭和23年京都大学理学部を卒業後、同学部助手、京都大学分校講師、助教授を経て、昭和

38年教養部教授に就任、平成元年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和48年4月から同50年3月まで京都大学評議員として大学の管理運営に貢献された。

本学退官後は、岡山理科大学教授を経て、倉敷芸術科学大学教授として活躍されていた。

先生の専門は数学で、なかでも微分幾何学の研究において数多くの優れた研究業績を残された。特に

特性類の研究は、従来の局所理論から現代的大域理論への転換期においての先駆的研究として内外から高い評価を得られた。また、日本数学会評議員として学会の運営に多大の貢献をされた。主な著書に

『多様体』、『幾何学入門』等がある。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(総合人間学部)

岩井 重久 名誉教授



本学名誉教授 岩井重久先生は、10月14日逝去された。享年80。

先生は、昭和14年京都帝国大学工学部土木工学科を卒業、同大学工学部助教授、陸軍軍政地教授を経て、昭和24年京都大学工学部教授に就任、土木工学科衛生工学講座、衛生工学科放射線衛生工学講座、産業衛生工学講座、水道工学講座を担当された。昭和54年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、昭和55年4月から平成元年3月まで福井工業大学教授、同年4月からは同大学非常勤講師として活躍されていた。

先生は、統計水文学、放射線衛生工学、廃棄物工学、水質汚濁制御等の幅広い分野の主導者として優れた研究業績を残され、統計水文学における「岩井法」、水質汚濁制御における「原単位法」等、環境衛生工学分野の規範となる多くの工学的手法を開拓された。

環境技術研究協会、(社)土木学会衛生工学委員会、国際および日本水質汚濁研究協会、(社)日本廃棄物対策協会等の他、国および多くの地方自治体の各種委員会の会長、副会長、理事、支部長、委員長等の要職を歴任された。これら一連の教育・研究活動、学会活動、社会的活動により、平成元年勲二等瑞宝章を受けられた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(大学院工学研究科)

伊藤 義教 名誉教授



本学名誉教授 伊藤義教先生は、10月23日逝去された。享年87。

先生は、昭和10年京都帝国大学文学部文学科を卒業、同年同大学院に入学し、昭和15年まで在籍されたあと昭和16年文学部講師嘱託、昭和23年京都大学文学部講師に就任、同43年教授に昇任、梵語学梵文学講座を担当された。昭和47年停年により退官され、同49年に京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、京都産業大学外国語学部教授を務められた。

先生の専門は古代・中世イラン語であり、最古のイラン宗教文献『アヴェスター』とその解釈に不可欠な中世イラン語注釈文献の研究で大きな業績を残された。イラン研究に完全を期すため、古代オリエント世界の文化を広く研究され、さらには宗教文献だけでなく、出土碑文の解読に従事されたこともあり、イスラム以前のイラン史の再構にも貴重な貢献をされた。イラン学研究での功績は学界で高く評価され、日本オリエント学会から第一回三笠宮賞が授与されている。代表的著作としては『古代ペルシャ』と『ゾロアスター研究』があり、これによって原典に基づく古代イラン文化の詳細な記述が初めて日本で広く知られるところとなった。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(大学院文学研究科)

京都大学の百年（第22回）

京都帝国大学における祝日の変遷(続)

前回は、京都帝国大学の記念祝日が何回かの変化を経て、1922（大正11）年に6月18日に決まるまでの経緯を追ってみた。その文章の最後に、1925（大正14）年に5月第3日曜が祝日に追加されたこと、および1937（昭和12）年にそれが廃止されたことについての事情は他日を期すと書いたが、今回はその宿題を果たしたい。

従来記念祝日では、講演会や若干の学内展示、そして大学関係者等を招いた祝宴などが催されていたが、やがて学生の側から独自の祝賀会を開催したいという希望が出されるようになったらしい。1924（大正13）年の史料によれば評議会で「学生ノ記念祝賀会举行ノ希望ヲ許可」したとある。その結果、この年6月18日、農学部グラウンドで教官、職員、学生、卒業生等の親睦を図るための「大懇親会」が举行されたのであった。当日は、模擬店が出て弁当やおでん、酒などが振る舞われ、余興や福引等も行われるなど園遊会といってよい形式のものだった。余興といっても本格的なもので、舞台をしつらえて尾上松之助による芝居なども披露され好評を博したようだ。学生の側、と書いたが、大懇親会を主催したのは学友会だった。学友会は学生を正会員、教職員を特別会員、卒業生を会友とする親睦機関で、運動系と文化系合わせて十数部が属していた。会長は総長で幹事には各学部長が就任していたように、戦後の自治会とは異なり官製の色彩の強い組織だったが、代議員や総務委員は学生から選ばれ、実際の運営は学生が主体であった。

好評だった上記の園遊会は、翌年も催される計画であったが、問題は開催の時期だった。6月18日は梅雨時であり、天候が不順で特に模擬店の食べ物の扱いが危惧された。学友会の代議員から総長宛に時

期の変更の要求も出されており、そのせいもあってか、1925年から1か月繰り上がって5月の第3日曜を祝日とすることになったのである。ちなみに6月18日の創立記念日にはこの年以後も従来どおりの講演会が行われており、いわば行事の棲み分けが始められたのである。1925年といえば、京大では学会や講演会開催の場としての楽友会館が完成した年であり、『京都帝国大学新聞』の刊行が始まったのもこの年であった。時代状況としてはまさに大正デモクラシーの末期にあたっていたが、学生たちの自主的な活動は本格的な成長期を迎えていた。

各年度の園遊会の内容をくらべてみると、最も盛大だったのは1931（昭和6）年だったようである。この年には、日活による時代劇の上演や吉本興業の漫才、芸術大学のレビューなどの催しがあり、大阪朝日新聞社機による祝賀飛行なども行われ、村山龍平社長からの祝辞も読み上げられた。表紙の写真は、それよりも少し前の年度の園遊会の様子だが、多数の学生が集まり、非常に盛り上がっていたことがうかがわれる。このように5月第3日曜の園遊会は、イメージとしては創立記念式典よりも現在の学園祭に近いものであった。学生たちの親睦の場として、園遊会はその地位を確立したようにみえた。

ところが、このような盛大な催しを行えるような雰囲気はこれ以後大学内でも急速に薄れていく。翌1932年は前年同様に開催されたが、滝川事件の年である1933年からは野外での園遊会は行われなくなり、1935年には催物一切を停止、そして1937年には祝日自体が廃止されることになったのである。大学の祝日は講演会が行われる6月18日に一本化され、その内容も次第に時局を反映したものに変わっていった。ほんの一時期催された園遊会は、戦前の帝国大学における学生たちの束の間の「祭り」の空間だったのかもしれない。（百年史編集史料室）

洛書

オゾン研究の復活

村松 久史

地球環境問題の一つとしてオゾン層破壊が注目されている。オゾン層の研究について言えば1980年代

前半からブームと言ってもよいほどの活況をみせている。このきっかけはフロンによってオゾン層が破壊され、その結果太陽の有害紫外線の増加が懸念されるからである。しかしこの活況には長い序奏があった。私は大学卒業と同時に1950年代末からオゾ

ンの観測に従事したが、最初は英国製のオゾン測定計（ドブソン分光光度計）に対する日本製の分光光度計の較正が主なる課題であった。これらの測器は国内5地点と昭和基地で使用されたが、その目的は気象学的なものであり、全世界の観測網の中で日本では気象庁が観測を実施した。フロンによるオゾン層の破壊は南極のオゾンホールを除外すると数十年間に数パーセント程度であり、その検出には測定器の点検・調整などによる測定精度の向上・維持が重要で大きな努力が必要である。

オゾンの研究のブームは100年以上前にもあった。それはオゾンの名付親のシェーンバインが考案したオゾン計が普及し、前世紀末の四分の一世紀には全世界の300地点以上で測定がなされた。当時は伝染病に対するオゾンの殺菌作用が注目されていたようである。シェーンバイン考案のオゾン計はヨウ化カリ澱粉紙の変色度合いからオゾン濃度を決めるもので、当時からその測定精度には問題があるとされていた。このオゾンブームは20世紀初頭の10年以内に急激に衰えた。その原因はさだかでないがオゾン測定の精度の悪いことも原因の一つと推測される。

日本では気象観測が始められた1875（明治8）年から1906年まで英国製の測器を使い気象台で測定が行われた。

この100年以上前のオゾン濃度の資料が最近見つかり大いに注目されている。その理由は現在人間活動のため大気中のオゾン濃度は増加しており、人間活動の少なかった100年前のオゾン濃度を知ることができるからであるが、上記のシェーンバインのオゾン計の資料からは正確な値は出せないようである。

今回と100年前のオゾンブームには共通点があるように見える。まず人間の健康に関係していること、世界的に測定がなされること、またオゾンの測定精度が問題となること（前回は地上付近、今回は成層圏も含むという違いがあるが）などである。100年以前に比べ、現在はオゾンに関して非常に複雑な化学反応が考えられており、これに関係する物質すべてを測定することは非常に困難である。願わくはこれらの物質の満足すべき測定が行われる前にブームが終わらないことを期待する。

（むらまつ ひさふみ 防災研究所教授）

お知らせ

「白馬山の家」の冬季開設

本学の学生及び教職員の厚生施設として、例年夏季及び冬季に開設されている「白馬山の家」を、今冬も下記により開設しますので、ご利用下さい。

この山の家は、中部山岳国立公園白馬山麓の梅池高原にあり、雄大な北アルプスの峰々に囲まれ、積雪量も多く、雪質の良さとともにスキーには絶好の条件を備えており、初心者向きから上級者向きまで各種のゲレンデがあります。

なお、建物は山小屋風の木造地上2階、地下1階建て、間取りは1階が食堂兼談話室、2階が寝室、地階が浴室、乾燥室等からなっています。

記

1. 名 称 京都大学^{はくぼ}白馬山の家（電話 0261-83-2405）
2. 所 在 地 長野県北安曇郡小谷村大字千国字柳久保乙869の2
（交通機関）JR 大糸線「白馬大池駅」下車、松本電鉄バス「親^{おや}の原^{はら}」下車、徒歩約20分
3. 開設期間 12月20日（金）～1月10日（金）並びに2月20日（木）～4月10日（木）
4. 収容人員 26名
5. 所要経費 1人1泊 使用料120円、ほかに食費、暖房費等実費
6. 申し込み及び利用に関する詳細は、体育会事務局（西部構内総合体育館内、電話学内2574）に照会してください。
7. そ の 他 当施設には、駐車場がないため、自動車での利用は避けて下さい。（学生部）

